主 題：恵みシリーズ8、あなたは決して渴かない—見ていながら信じない罪—
聖書箇所：ヨハネの福音書 6章28-40節

新約聖書ヨハネ6章をお開きください。

きょう私たちは6：28-40を見ていきますが、イエス様がお話をなさる前に、男だけで5000人の人々の空腹が満たされたという奇跡が行なわれました。それを体験した者たちはイエスを探し、ガリラヤ湖の北のカペナウムという町でやっとイエスを見つけます。そこに彼らが集まってイエス様と話した内容がこの箇所に記されています。彼らがイエス様と出会った時に、イエス様は彼らに対して、26節「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」と言います。イエス様は彼らが自分を探していた目的、動機をちゃんとご存じであることを、これを通して我々は見ることが出来ます。

イエス様が言われたように、彼らは霊的なことに関心があってイエス様のところに来たのではなかったのです。彼らはパンを食べてお腹がいっぱいになったからイエス様のところに来たのだと。主イエス・キリストはこの大きな奇跡をもってご自分がだれであるかを明らかにされました。「しるし」と記されています。このような大きなしるし、奇跡を目撃していながら、人々はなおもこのイエスを信じようとはしていませんでした。もっと言えば彼らはその必要さえも感じていなかった。どんなしるしを見ても、どんなメッセージを聞いてもあなたたちは心を開かない。ですからもうあなたたちは帰りなさい、あなたたちにはもううんざりだから帰れと追い返すこともできたのですが、イエス様はそんなことはなさらなかった。最も優れた教師であるイエス様は、非常に見事に彼らを救いへと導かれて行くのです。物質的な関心を持っていた彼らの心を、最も大切な霊的関心へと導いておられます。食べるパンを求めてやって来た彼らに、もっと大切なものをイエス様はお教えになります。どんなにパンを食べたとしても永遠のいのちを持っていなければ悲しい結果が待っています。この群衆にとって何が最も大切かをご存じだったイエス様は、その永遠のいのちについて救いについて人々にお語りになるわけです。その様子が28節のところから出て来ます。

A. 「救いへの招き」 28-34節

1. 「人の考えに基づいた救い」 28節

まず28節「すると彼らはイエスに言った。『私たちは、神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。』」とあります。どうして彼らがこういうことをイエス様に対して言ったのか、理由ははっきりしています。その前のみことば27節「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」を原語から直訳すると、「働きなさい。なくなる食べ物のためではなく、永遠のいのちへと残る食べ物のために」となります。イエス様はここで「働き」ということを強調されました。これは命令形です。ですからそれを聞いていた群衆は、ではどんな働きをすればいいのか、どんな行いをすればこの永遠のいのちを得ることができるのかと当然考えました。「何をすべきでしょうか」と言うのです。これは特定のすべき働きをイエス様に問うているのです。このすばらしい永遠のいのちを得るためにどんな特別な働きをすればいいのか、それが彼らの問いかけでした。しかもおもしろいのは、どんな行ないと言わずに「神のわざ」と言っています。つまり彼らは、この永遠のいのちを得るために、神が私たち人間に要求される働きは何かと問うたわけです。彼らがこういう質問をした背景には、彼らが受けていた行ないによって救われるという教えがあることは間違いありません。彼らのどういう行ないをすれば、どういう神のわざをなせばこの救いに与るのかという質問の中に、彼らの誤った教えが心の深いところに刻まれていたことを見ることが出来ます。

2. 「神の備えられた救い」 29-34節

イエス様はそういう彼らを真理へと見事に導いて行かれます。人間の考える救いについて彼らが述べた後、29節からイエス様は神様が備えられた救いについて話しておられます。救いに関する神の真理をイエス様はここから教えて行かれるのです。「イエスは答えて言われた。『あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。』」と。彼らが「神のわざ」と言ったので、イエス様は同じことばを使って彼らの心を引きつけて行かれる。そして神が何を要求されているのかをここで明確にお話しになっています。

1) 「主イエスを信じる信仰」による

「あなたがたが、神が遣わした者を信じる」、それが「神のわざ」なのだ。つまり、救いを得るためにどんな特定の働きをしたらいいのですかと聞く群衆に対して、イエス様はそれは神が遣わした人を信じることだとお話しになった。この29節のみことばを読んで、何を言われているのかと思われるかも

しれない。ところが30節を見ると、「そこで彼らはイエスに言った。『それでは、私たちが見てあなたを信じるために、』とあります。群衆はイエス様が言われていることを明確に理解したということです。29節でイエス様が言われたのは、「神が遣わした者を信じること、それが神のわざ」であり、それによって救いに与るのだと。そしてそれを受けて群衆は「私たちが見てあなたを信じるために、』と言ったわけです。つまり群衆はイエス様がここで私を信じなさいと言われたことをちゃんと理解しています。「私を信じなさい」——それがイエス様がここでお話しになったメッセージだったのです。そして群衆はそのメッセージをしっかりと正確にくみ取っているのです。

2) 「信じるための証拠」を要求 30-31節

そして、30節の後半から31節を見ると、イエス様を信じなさいというメッセージを聞いた彼らは、ではあなたを信じていいという証拠を教えてくださいとイエス様に問いかけています。あなたは私を信じなさいと言われるけれども、証拠を示してくださいと。30節b「しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。31 私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた。』と書いてあるとおりです。」と。彼らはイエス様の話を聞いても正しく理解していませんでした。イエス様のいろいろな奇跡を確かに見たにもかかわらず、彼らはよく理解していなかった。霊的に盲目であったために彼らはイエス様から証拠を求めたのです。そして彼らはモーセを引き合いに出して、あなたはモーセに勝るのですかと。

3) 「主イエスの説明」 32-33節

イエス様はそれに対して32-33節で「イエスは彼らに言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。』』とお答えになります。群衆がモーセと主を比較しようとしているので、それを受けてイエス様はモーセとの決定的な違いを群衆に告げます。モーセは「天からのパン」を与えたとあります。ところが父なる神は「天からまことのパン」をお与えになりますと。イエス様の話は非常に巧みです。彼らの言っていることを否定するのではなく、彼らのことばを受けて真理を彼らに教えようとしておられる。モーセは「天からのパン」を与えてくれたと彼らが言うので、私は、そして私の父はあなたたちに「天からまことのパン」を与えるとイエス様は言われたのです。モーセが与えたものとは違うことをイエス様は明らかにされます。

主はここでモーセが与えたマナはまことのパンではない。なぜならマナはいのちを与えることができないからだと教えます。このマナは食べた者たちに一時的な満足しか与えることができませんでした。空腹が満たされるのはその時だけです。しかもそのマナは腐ってしまうものでした。しかし主は、天からの本当のパンは腐ることなく、食べる人に永遠の満足を与え、マナのように食べた時だけの一時的なものではないと言われます。この「天からまことのパン」を食べるならば、その人には永遠の満足が与えられる。もつといえばこのパンは永遠のいのちを与えることができるのだとお話しになりました。

そして32節で、正確に言えばあのモーセのマナでさえモーセが与えたのではないと言っています。この32節を部分的に直訳すると、「モーセではない、天からのパンをあなたがたに与えたのは。しかし、あなたたちに天からの本当のパンを与える私の父が」となります。ですからそれはモーセではなく、あなたたちに本当のパンを与える父なる神が、実はマナをも与えたのだと主はここで言われています。でも明らかに私たちの先祖は荒野でのマナというすごい奇跡を経験した。だからあれよりも大きなことをあなたがしてくださなければあなたを信じることはできませんと、彼らは言い張ります。そこでイエス様は私の与えるパンは、食べる者たちに永遠のいのちをもたらすものだから、あのマナよりもはるかに優れたものだとここで人々にお話しになるわけです。そして、この「天からまことのパン」というのは一体何なのか——。35節を見るとそれは明らかに主ご自身であることがわかります。「わたしがいのちのパン」ですと言われた。

こうしてしるしを見せてくださいと言う人々に対して、イエス様は、もうあなたたちは数々の奇跡を通してそのことを見て来たし、そして今あなたたちは私を見ていますとお告げになりました。でもこのメッセージを聞いていながら群衆たちはイエス様が言われたことを理解していませんでした。ですから彼らが求めたのは、このすばらしい祝福をもたらすパンの話です。34節「そこで彼らはイエスに言った。『主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。』』と、そんなすごい効力を持ったパンをどうぞいつも私たちにお与えくださいと言います。イエス様の話を聞いていながらまだ完全に霊的なことを理解していたわけではなかったことが明らかです。ちょうどあのサマリヤの女が真理を悟るまでに時間がかかったように、彼らもこの大切な真理をなかなか理解しませんでした。

B. 「救いの説明」 35-40節

そこでイエス様はこのパンの祝福について彼らに教えて行かれます。そしてイエス様が特にこの35節から何をなさるか——。最初にお話ししたように、この群衆を救いへと導いて行こうとされるわけですが、彼らに渴きを与えることによってイエス様は救いへと導こうとしておられます。イエス様はここから救いというものを説明して行かれます。

1. 「その祝福」 35節

イエスは言われた。『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。

二つのことを言っています。①「わたしに来る者は決して飢えることが」ない、空腹を経験することがないと。もう一つは②「わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことが」ないと、渴きを覚えないと。

主の約束:

イエス様はここで神様の約束を与えておられます。どんな約束か——。このいのちのパンをいただく者たちは、本当の満足を得、このパンを食べる者はだれも空腹を覚えることがなく、渴きを覚えることがないと。見ていただくと、「わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は……決して渴くことはありません。」と、例外がないということです。イエス・キリストを信じるすべての者たちにこのすばらしい本当の満足が与えられるのだということが約束されています。皆さんお気づきになったように、私に来る者と私を信じる者は同意語です。どちらも信じるということです。ことばは違いますが同じことを言われています。イエス様を信じるすべての者には例外なく本当の満足が与えられるのだと。

主の断定:

しかもその約束を断定しておられる。決して飢えない、決して渴かないと言っています。実はこの「飢える」と「渴く」という二つの動詞の前に、二つの否定語が並んでいます。決して、決して飢えることがない、決して、決して渴くことがないと否定を強調されているわけです。これが神様の約束された祝福であり、主イエス・キリストを信じる者たちは決して渴くことがないと。どんな時でも私たちは心からの満足を持って生きることができる。

適応:

実はここを私たちはよく考えなければいけないと思います。もう皆さんは物質があなたの心の満足をもたらさないことはよくわかりです。それまでの私たちはこの世の偽りに惑わされて、こういう最新の機械を手にしたとか、こういった物を手にしたとか、物があなたの心の渴きを満たしてくれると思っていました。でもそれは一時的で、すぐにまた渴きを覚えます。また何か新しい物を得なければいけないし、また別の物を手にしなればいけない。そうしていつまでたっても私たちは心の本当の満足を得ることはなかった。なぜなら本当の満足は神様が与えるものだからです。霊的満足というものが私たちの心に満足をもたらすのです。詩篇107:9「まことに主は渴いたたましいを満ち足らせ、飢えたたましいを良いもので満たされた。」、神様は救いに与ったひとりひとりにこう約束してくださっている。つまりクリスチャンであるあなたに、渴いたたましいを満ちさせてくださり、飢えたたましいをよいもので満たしてくださるという約束を神様は下さっているわけです。問題はそれを日々経験しながら生きておられるかです。

・「いつも喜びに満ちあふれている」——心からの喜び

パウロは彼自身、またあのマケドニアの教会の人々が大変な困難の中にあっても、常に喜びに満たされていたことを明かしてくれています。彼はこう言います。「私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」、Ⅱコリント7:4です。パウロは確かにこのような信仰生活を生きていたわけです。大変な迫害を経験しながら、私はその中であって喜びに満ちあふれていると彼は言います。どうぞご自分に問いかけてみてください。あなたがこのパウロの証に対してアーメン、そのとおりだと言えるかどうかです。なぜなら今私たちは、この救いに与った信仰者には、神がすばらしい祝福を下され、私たちの心は満たされるということ見てきました。詩篇のみことばが言ったように渴いたたましいを主は満たして下さり、そして飢えたたましいをよいもので満たして下さる。我々の心は喜びにあふれているはずですが、パウロがすばらしいクリスチャンだったからではないのです。パウロは神様の約束を日々の生活を通して経験していたのです。私たちが自分に問いかけなければいけないのは、私はパウロやマケドニアのクリスチャンたちが経験していたような、どんな時でもこの喜びを経験しているかどうかです。本当にその喜びを持って生きているかどうかです。喜びが自分のうちからあふれ出てきているかどうかです。

・「いつも満ち足りている」——心からの満足

パウロは「私はいつも満ち足りている」と言います。同じⅡコリント9:8でも「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」と、「常にすべてのことに満ちたり」と、確信を持っていたわけです。それはパウロ自身がそれを経験していたからです。だからパウロはピリピ4:11で「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」と言うのです。預金を見た時に預金にお金が残ってなくても私は喜んでいて、おいしい物を食べていようと食べていまいと関係ない、私の心は喜んでいて。どんな境遇にあっても、私は満ち足りていると。今私たちが見ているのは、あなたと関係のない話ではないのです。今私たちが見ているのは、あなたの神があなたに約束されたことなのです。神はあなたに、あなたはこの地上にあっても本当の満足をもって、何をもってしても満たすことのなかった心を神が満たして下さり、喜びをもって、満足をもって歩むことができると言われたのです。だからもしそういう歩みをしていなければどこかに問題があるわけです。

◎ パウロのように生きる鍵

その問題は、みことばをただ聞くだけで実践しないことです。悲しいことに、皆さんがどんなに説教のノートをお書きになって、そのファイルをどんなにたくさん持っておられても、それは皆さんの力にならないのです。あなたが学ばれた真理を日々の生活で生かして行った時にそれがあなたの力になるのです。神はあなたを変えようとしてくださっている。神様はこんな祝福をあなたに約束してくださり、そんな祝福をもってあなたは生きることができるのです。パウロがそうだったように、マケドニアのクリスチャンたちがそうであったように。私たちがあなたもこのような生き方をすることが可能なのです。

そのすべての鍵は、神が言われたことを神の助けをいただいて実践することです。別の次元の話をしているのではないのです。もしこういう日々を過ごしていないとするならば、神が約束されたすばらしい祝福を逃しているのです。神を知らない人々と同じようにいろいろなことを思い煩って悩みながら生きる、そういう生き方はもう終わったのです。でもそういう生き方に戻ることでもできるのです。私たちは、この神様の祝福をいただいて、きょうをいきたいと願います。こんな祝福が約束されている以上、その祝福を日々本当に経験しながら生きていきたいと思いませんか？神様はあなたにすばらしい宝を下さっていながら、あなたはそのすばらしさに気づいていない。すべての鍵は神の言われたことを神の助けをもって実践することです。それをなさるまであなたの信仰は変わらないし、成長しようがない。私たちはこのイエス様のおことばを聞き、イエス様が与えてくださったすばらしい祝福をこうして教えられたのです。イエス・キリストは私たちに本当の満足を与えるとされたのです。決してあなたは渴くことがないと。その祝福を喜びながら、楽しみながら生きることができるのです。あなたは主の助けをいただきながらそうやって生きることです。

2. 「そのみわざ」 36-37a、40節

1) 人の責任:「彼らの誤りを非難しておられる」 36、40節

続いてイエス様は36節でこう言われています。「しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。」、40節の初め「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。」。まずイエス様はここで救いに関する人間の責任について語られます。彼らが誤った選択をしているがゆえに彼らを非難された。「あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと。あなたたちの選択は間違っていると。40節「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が」と。だから主は群衆にこの救いに関してあなたたちには大きな責任がある。あなたたちはこの救いを心から受け入れるのか、それとも継続して逆らい続けるのか、責任があると。そしてあなたたちが選択していることは正しくないと、イエス様は彼らの誤った選択を非難されている。

2) 神による救い:神の選び 37a節

そしてその上で、この救いに関して次のようなことを教えるのです。37節の初めに「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに來ます。」と、イエス様はここで驚くべきことを言われた。そのことを44節でも言われています。「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。」と。「父がわたしにお与えになる」というのは、救いに関して父なる神様の働きを教えています。父なる神様が「引き寄せられないかぎり」、その人は救いに至ることはないと言われているのです。ということは、あなたがこの救いに与ったのは、父なる神があなたを引き寄せてくださったからです。神があなたのうちに働き、そして神ご自身があなたを救いへと導いてくださった。

もう1カ所見てください。パウロたちがアンテオケの町に行った時の話です。パウロとバルナバがそこにいました。彼らが群衆にイエス様のこのすばらしい救いの話をし、主のおことばを語りました。多くの者たちがそのメッセージを聞いてこの救いに与りました。そして今度は町じゅうの者たちがパウロたちのところにやって来て、このメッセージを聞こうとしたのです。するとそれを見ていたユダヤ人たちは非常にねたみに駆られました。そして彼らに反対し、彼らをののしるわけです。そこでパウロは人々に「私たちはこれから異邦人に伝道に行く」と言います。それを聞いた人々は大いに喜びました。もちろんこの選択はパウロたちの人間的な考えではなく、主のみこころであったことは明らかです。そのことが記されているのは使徒13章ですが、その中で48節「異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。」と記されています。パウロたちがこれから異邦人たちのところへ行くとき聞いた時に彼らが大いに喜び、「そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰にはいった。」と。ですからみことばを見た時に、確かに聖書は神様が働き罪人を救いへと導いてくださることを教えています。神が罪人の心に働き、彼らを救いへと導いてくれるのです。神のことが全くわからなかった、霊的に死んだ状態にある罪人に神が働き、彼らに罪を示し、救いが必要であることを悟らせ、そしてこの主イエス・キリストによって備えられた完璧な救いへと父なる神ご自身が導いてくださる。そうやって皆さんは救われたのです。それが神の救いだともみことばは教えてくれるのです。

この箇所に「そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰にはいった。」とあります。ではこの「永遠のいのちに定められていた人たちはだれによって永遠のいのちに定められていたのか」というと、父なる神です。父なる神様がそのように定められた。そのように神様がお決めになったのです。ということはあなたがこの救いに

与ったのは、そのように神様がお決めになったからです。世界を造るずっと以前から神はそのように計画されていた。そして私たちはこの救いに招かれたということを教えているのです。しかし、同時に今見て来たように私たち人間に責任があるのだとも教えています。確かに私たちには人間の責任と神の救いというのはなかなか理解しがたいものです。でも私たちが理解したから信じるのではない、それを神様が教えておられるから信じるのです。それが私たちの信仰です。そのように神様が言われているのです。そのように我々は信じるのです。我々ひとりひとりには、どのような選択をするかという責任があります。そして神が私を選んでおられたから、この救いに神は私を招いてくださったのだ、これが救いだともみことばは私たちに教えてくれるのです。クリスチャンはもっとも感謝すべきです。なぜこんな私がこの救いに招かれたのかと。だから私たちはこの方のすばらしさを語るのです。この方のすばらしさを伝えるのです。こんな罪人を神は救ってくださったと。

3. 「その約束」 37b、39節 「永遠の保証」

その話をなされたイエス様は今度は救われている者たちに与えるすばらしい約束を伝えてくれています。37b節「そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」とあります。この「捨てません」というのは、確かに見捨てるという意味もあるのですが、先ほど私たちが見て来たように、否定を強調しているのです。またここにも否定語が二つついています。私のところに来る者を私は決して決して捨てません、見捨てませんと。そして39節「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。」とあります。この「失う」というのは、自分が所有しているものを失うということです。神の所有しておられるものを神が失うことは絶対ないということです。我々クリスチャンは神の所有となりました。私たちの持ち主は神です。罪の市場からご自分のひとり子のイエス・キリストの血潮によって、いのちによってあなたを買い出してください、我々は神のものとなったのです。このみことばが言うのは、「わたしがひとりも失うこと」はないと。私の持ち物、私の所有している物を絶対に私は失わないと。そんな約束がここに記されているわけです。

では何をここで保証したのか——。救いに与った者たちは、この救いを絶対に絶対に失うことがないということです。これが神様が私たちに約束されたことです。永遠の保証です。感謝なことに神の救いに与った者たちはこの救いを失うことがなく、父が子に与える者がひとりも滅びることがない。皆がいのちへとよみがえるのだとイエス様が約束された。

4. 「その確実さ」 35、37-40節

そういった約束を与えただけではない。最後のところを見ると、その確実さについて、この約束が必ずそうなるということをイエス様はお話しになっておられます。35節「イエスは言われた、『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。』、そしてイエス様はその祝福の数々を述べてくださいました。38節「わたしが天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」、イエス様がここで言わんとしていることは、救いの祝福についてです。こういうすばらしい約束を私はあなたたちに与えると。なぜそれが揺るがない真実なのか——。それはこれを話している私が神なのだということをイエス様はここでその証拠を挙げて教えています。

1) 主イエスが父のみこころに従った 38-39節

まず一つは主イエス・キリストは父なる神様のみこころに完璧に従ったということが38節に出て来ました。イエス様が言われたように、「天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方(父なる神様)のみこころを行なうため」だと。39節には「わたしを遣わした方のみこころは」とあります。こうして父なる神のみこころを行なうためにやって来た、そして父なる神の三つのみこころを説明していただき、イエス様はそのそれぞれのみこころに従ったことを教えています。

(1) 一つ目のみこころは、39節の中に「わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失」われないことだとあります。そしてイエス様は37節で、「そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」と言います。

(2) 二つ目のみこころは39節、私が「ひとりひとりを終わりの日によみがえらせ」ることだと、イエス様は40節で言われるのです。「わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」と。

(3) 三つ目のみこころは40節の初めに出て来ます。「わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つこと」だと。イエス様は35節で「わたしがいのちのパンです。」と言われるのです。

つまり、こうしてイエス様はご自分が父なる神のみこころに完璧に従って来られたこと、また従っておられることを明らかにしました。

2) 父のみこころを行なえる者: 主イエスにその力があることを教えている!

もう一つ私たちが覚えるべきことは、イエス様は父なる神のみこころにただ従っただけではなく、父なる神様のみこころを実践できる力がおありだということです。イエス様はただ何となく父なる神のみこころに従ったのではないのです。先ほど見て来たように、「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」と、イエス様ご自身がこの宣言をなされたのです。だれがそんなことを言えますか? 我々がそんなことを口にしたら神を冒瀆していると言われます。なぜならできないことを言っているからです。しかしイエス様は「わたしのところに来る者を、わたしは決

して捨て」ないと言われた。イエス様は私はその人たち「ひとりひとり終わりの日によみがえらせませす」と言われた。イエス様は「わたしがいのちのパンです」と、私は彼らに永遠のいのちを与えると。父なる神様に完璧に従っただけではない。この神のみこころを行なうことができる、その力が主のうちにあることを明らかにされているのです。そしてイエス様はご自分が言われたことを実践できる神なのだということを群衆の前で明らかにされたのです。

パンを求めてやって来た群衆に対してパンよりもはるかにすばらしい、また重要なものがあるということを教えるために、イエス様は見事に彼らを導いて行かれます。彼らの関心からもっと大切な真理をイエス様は導いて来られた。空腹があるゆえにパンを求めた彼らに、本当の空腹は神しか満たすことができないということを教えて行かれます。そしてそれを満たすことができる神は私なのだと言われます。そしてこの人たちをこの救いへと招かれるのです。

すばらしい主ご自身のメッセージです。そして感謝なことに神はあなたや私をこのすばらしい救いへと招いてくださった。渇きが満たされた者として、それにふさわしく生きることです。この主にあって渇きが満たされるのだということを伝える責任があなたや私にはあるのです。この祝福をいただいたのはあなたであり私だからです。信仰者の皆さん、みことばを実践する人になってください。神様のみことばを実践しなければ、せっかくあなたのものとして与えられているのに、この祝福を経験しないままこの地上での旅路を終わってしまいます。悲しいと思いませんか？どこか美しいところに行ってすばらしいと人々に話す時に、人々はそれを聞いて本当にそんなに美しかったの？と尋ねるでしょう。いや、私は行ってないけど人からそんな話を聞いたのとか、駅前のパンフレットを見たのとか、とってもきれいだと思うよでは説得力がないですよ。すごくおいしいものがあるんだと言って、あなたが食べたの？と尋ねられた時、いや食べてないけれども、口コミ情報があったんだでは信用しませんでしょう？私たちはだれかから聞いた話を伝えるのではないのです。自分が経験したことを語るのです。主は私の心を満たしてくださったと、そんな救い主がおられるのだと。どうぞそのメッセージを持って出て行くことです。どうぞそのメッセージを神の助けをいただきながらしっかり語ること、また生きること、それが私たちの責任です。

どうぞそのようにこの新しい一週間を歩んでください。

《考えましょう》

1. 主イエスはどのような「満足」を約束されたのかをお書きください。
2. 「父がわたしにお与えになる者(37節)」、「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり(44節)」の意味を説明してください。
3. 「わたしがひとりも失うことなく(39節)」の意味を説明してください。
4. 主イエスが「いのちのパン(35節)」であることをあなたのことばで証明してください。